

半導体漫遊記

湯之上隆

184

前回の半導体漫遊記(183)で、「シャープは真に『復活』などしていない。危篤状態から一命を取り留めたに過ぎない」ことを述べた。本稿では、2016年にシャープを買収した台湾のホンハイもまた、苦境に陥っていることを論じる。

ホンハイは、郭台銘CEOが1974年に設立した台湾の企業である。当初は金型をつくり、その金型で部品を製造する会社だった。1981年にインテルのプロセッサが搭載される基板のコンネクタを製造するビジネスを勝ち取ったところか

ら、ホンハイの快進撃が始まった。ホンハイのビジネスは、コネクタだけでなく、コネクタだけではない。ホンハイの売上高は、2015年には約17兆円に到達した。と

ホンハイも苦境に

シャープをどう活用できるか

ホンハイは、同様な品、パソコン、スマホを手法を、液晶テレビなどにおいて、世界のどの家電製品や携帯電話にも応用した。そして、アップルのiPhoneの受託生産を勝ち取ることに成功した。ホンハイの売上高は右肩上がりに成長を続けた。ホンハイは、主として中国に巨大な組み立て工場を多数建設し、その従業員数は130万人に達した。これは製造業においては最大規模の社員数であり、すべての企業の中でも、米ウォールマートの220万人に次いで第2位の規模である。その結果、ホンハイは、デジタル家電製

て工場を多数建設し、その従業員数は130万人に達した。これは製造業においては最大規模の社員数であり、すべての企業の中でも、米ウォールマートの220万人に次いで第2位の規模である。その結果、ホンハイは、デジタル家電製

ところが、16年に初めてピークアウトしてしま減収となった。一方、ったことにシンクロする。営業利益率は、そもそも数%しかなかったが、11年以降、増大をはじめ、16年には約4%を記録した。しか

つまり、ホンハイは、15年以降、売上高も営業利益率も、成長が止まってしまった。これは、アップルのiPhoneが15年に2億3122万台でピークアウトし、世界のスマホの出荷台数も16年に14億8720万台で

要するに、15年ごろに、ホンハイが築き上げてきたEMSというビジネスモデルが、限界を露呈したものと考

プを買収し、さらに17年には東芝メモリを買収しようとしたのだから、ホンハイが、シャープのブランドを手に入れることも目的の一つだったと思われ

ホンハイは、シャープが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。

ホンハイは、シャープが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。

ホンハイは、シャープが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。

ホンハイは、シャープが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。

ホンハイは、シャープが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。

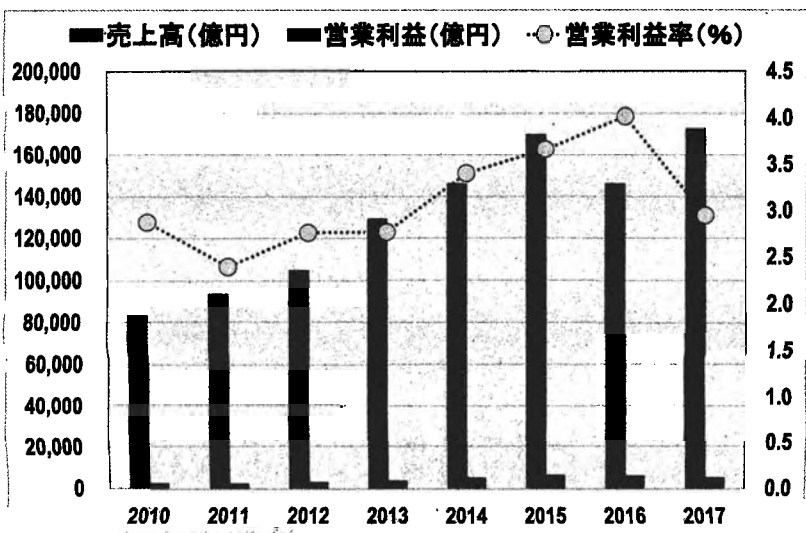


図1 鴻海の売上高、営業利益、営業利益率

出所:ホンハイのIRデータより筆者作成

ホンハイが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。

ホンハイが、今後再び成長に転じることができるとは、シャープの液晶技術とそのブランドをどう活用できるかにかかっている。ホンハイとシャープの行く末に注目したい。